

## 幼児期の環境と現在の性格の関係性

岡瀬 莉子 徳田 百合子 西田 愛実 平松 千春 山本 紗代

### 要旨

私たちは集団生活を営む中で、様々な性格の人たちと接する機会がある。集団に属する人たちの性格の多様化の原因は幼児期の過ごし方、環境ではないかと考え、アンケート調査を行った。その結果、幼児期の環境が現在の性格に大きく影響を及ぼしていることが明らかとなった。

キーワード： 幼児期、性格、ビッグファイブ、NEO-FFI

### 1 序論

私たちは小学校から集団の中での生活を余儀なくされている。その中で自分と気が合う人、合わない人がいて中でも比較的気が合う人と共に行動し、会話をすることが多く、また、趣味が似ている。気が合う人、合わない人が存在するのは性格の違いが原因だと考えた。また、その性格は幼児期の環境などの影響で形成されているのではないかと推測し、今回の研究を進めた。

### 2 実験方法

#### (1) 手順

- ① 岡山県立倉敷天城高校普通科1年生の男女200人にNEO-FFIを実施し性格因子を数値化する。
- ② 同様に幼児期の過ごし方、環境についてと、現在の過ごし方、環境についての2つの自作アンケートを実施する。また、質問内容はビッグファイブの性格因子（N：神経症傾向，E：外向性，O：開放性，A：協調性，C：誠実性）の値に関連するもので、二択で答える。
- ③ 基礎統計量はMicrosoft(R) Excelで集計し、ビッグファイブと自作アンケートの有意性を確かめるため、統計処理ソフトSPSSを使用し、Mann-WhitneyのU検定を用いて分析を行った。

#### (2) アンケート詳細

自作アンケートの内容（幼児期）として「①よく遊んでいたのは（外遊び・中遊び）②門限が（ある・ない）③テストの結果を親に見せるとき（緊張していた・緊張していなかった）④習い事を（していた・していなかった）⑤ペットを（飼っていた・飼っていなかった）⑥自分の部屋が（あった・なかった）⑦授業の時に、よく（発表していた・発表していなかった）⑧旅行に、よく（行っていた・行っていなかった）⑨宿題などをするとき親が（見ていた・見ていなかった）⑩友達とよく（話していた・話していなかった）⑪日常の出来事を親に（話していた・話していなかった）⑫パソコン、携帯電話、ゲーム機を（使っていた・使っていなかった）⑬兄弟関係を答える」の13項目の質問を行った。

これに加えて、幼児期との比較のために、現在の自分の状況について、自作アンケートの内容（現在）として「①、②、③、⑤、⑥、⑦、⑧、⑩、⑪」の9項目の質問を行った。

### 3 仮説の設定と検証

#### (1) 仮説の設定

幼児期の環境と現在の性格の関係性はあるのか、次の仮説を設定した。

【仮説】 幼児期の過ごし方、環境が似ている人は、現在の性格も似ている。

#### (2) 結果

表1 ビッグファイブの値と自作アンケート（幼児期）との関連を統計分析した結果

	①	②	③	⑤	⑥	⑦	⑧	⑩	⑪
N	—	—	—	—	—	—	0.006	—	—
E	0.006	—	—	0.05	0.009	0.004	—	0.006	0.025
O	—	0.031	—	—	—	—	—	—	—
A	—	—	—	0.032	—	—	—	—	—
C	—	—	0.05	—	—	—	—	0.016	—

有意水準は0.05とし  
有意差があるもののみ  
記載している。  
質問番号は2(2)の番  
号と同じである。

表2 幼児期から現在への回答の変化

	① - E	③ - C	⑦ - E	⑧ - N
1→1	30.6	20.8	33.8	27
2→1	26.6	23.3	-	-
1→2	24.8	23.3	27	28.7
2→2	21.8	25.9	24.6	31.8

Ex) ①よく遊んでいたのは(外遊び・中遊び) 外遊び: 1, 中遊び: 2  
 このように、右の回答は1, 左の回答は2とする。矢印は幼児期から現在の回答の変化を表している。

- (1) 表1より、例えば、①よく遊んでいたのは(外遊び・中遊び)の質問に関してEに有意差があることがわかる。その他、9つの質問で結果がみられた。また、例えば、①よく遊んでいたのは(外遊び・中遊び)の質問に関して、E因子の値について、外遊びと中遊びのそれぞれの平均値をとると、外遊び: 28.3, 中遊び: 23.8と偏りがあることがわかった。
- (2) ビックファイブの値と自作アンケート(現在)の値を分析した結果、質問②門限が(ある・ない)に関して0因子の有意差がなかった(表1の幼児期の結果では有意差があった)。また、質問⑥自分の部屋が(あった・なかった)と質問⑩日常の出来事を親に(話していた・話していなかった)の質問に関してE因子の有意差がなかった(これらについても、表1の幼児期の結果では有意差があった)。
- (3) 表2より、幼児期と現在の環境の2つの自作アンケートについて回答に変化がないグループと変化があるグループに分類し分析を行ったところ、表2のようにそれぞれに増加傾向、減少傾向がみられた。①-Eでは現在ともに1を選択した場合の30.6の値が幼児期に2から現在1に変化した26.6の値よりも大きい。現在ともに2を選択した場合の21.8の値が幼児期に1から現在2に変化した24.8の値よりも小さい。③-Cでは現在ともに1を選択した場合の20.8の値が幼児期に2から現在1に変化した23.3の値よりも小さい。現在ともに2を選択した場合の25.9の値が幼児期に1から現在2に変化した23.3の値よりも小さい。⑦-Eでは現在ともに2を選択した場合の24.6の値が幼児期に1から現在2に変化した27.0の値よりも大きい。⑧-Nでは現在ともに2を選択した場合の31.8の値が幼児期に1から現在2に変化した28.7の値よりも大きい。

#### 4 結論

結果(1)より、①幼児期によく外遊びをしていた人は外向性が強い気質があることがわかる。また同様に他の質問も選択した質問に関して平均値をとると、②幼児期に門限があった人は開放性の気質、③幼児期のころテストを親に見せるとき緊張していた人は外向性の気質、見せていなかった人は誠実性の気質、⑤幼児期にペットを飼っていた人は外向性と協調性の気質、⑥幼児期に自分の部屋があった人は外向性の気質、⑦幼児期に授業中発表していた人は外向性の気質、⑧幼児期に旅行に行っていた人は神経症傾向の気質、⑩幼児期に友達とよく話していた人は外向性と協調性の気質、⑪幼児期に日常の出来事を親に話していた人は外向性の気質⑫、パソコン、携帯電話、ゲーム機を使っていた人は協調性の気質であることがわかった。

結果(2)より0因子とE因子については、(幼児期)の調査では有意差があったが、(現在)では有意差がなかった。このことから、この二つの因子については、幼児期の環境が深く影響していることがわかる。

結果(3)より幼児期、これらは値に差があることから、①-E、③-C、⑦-E、⑧-Nのそれぞれは幼児期の環境の影響を受けていると考える。

#### 5 考察

集団生活において、個々の性格を理解することは時間がかかり難しいことであるが、この研究から相手の幼児期の環境などの簡単な質問をすればビックファイブにおいての性格の気質を判断できることがわかった。これによって、自分と気が合う人を比較的簡単に見つけることができるようになると考察する。

##### 【参考文献】

1. 氏原寛 他: 心理査定実践ハンドブック 2. 統計学の図鑑, (2006)
3. 桶井良幸 桶井貞美 統計学の図鑑, (2015)
4. 加藤司 心理学の研究法~実験法・測定法・統計法, (2008)

## 警告音による人の処理能力の変化

浅野 圭祐 伊東 光月 岩男 広飛 片山 翔 佐藤 史弥 丸川 怜也

### 要旨

生活の中で起こりうる緊急事態において私たちは素早く、正確な行動をとらなければならない。そういった状況下で使用される警告音は人にどのような影響を及ぼすのかについて疑問を持った。そこで仮説をたて検証を行ったところ警告音は人の処理能力の正確性と速さを低下させることが分かった。

キーワード：警告音、正確性、速さ、ストループテスト、処理能力

### 1 序論

日常生活の中にはさまざまな警告音がある。それらは緊急の場合など即座に回避すべき目的で用いられることが多い。これらの環境下でおこる事態は非常に緊迫している。その中で警告音に求められることは危険を回避する際、過剰な警告音によって不安や緊張をあおり、誤操作を引き起こしてはならないことである。このような最大限の安全性が求められる緊迫した状況においては、警告音を認知し、素早く正確な処理がなされなければならない。そこで本研究では警告音が人の処理能力にどのような変化を及ぼすのかについて調べた。

### 2 実験と仮説

#### (1) 仮説

警告音が人の処理能力にどのような変化を及ぼすのかについて、次の仮説を設定し検証することを試みた。

【仮説】警告音は人の処理能力の正確性と速さを低下させる。

#### (2) 実験方法

右の図1のような紙を20枚用意し、警告音が鳴っている場合と鳴っていない場合とでストループテストを行い、その正解数とタイムを測定した。

ストループテストとは同時に目にする二つの情報が干渉し合う現象を利用したテストである。

なお、本研究では日常の中で想定される警告音として火災報知器の音<sup>1)</sup>を使用した。



図1 ストループテスト用紙

### 3 結果

警告音が鳴っている場合と鳴っていない場合でその正解数、タイム、それぞれの差分(音無し-音あり)の平均値をMicrosoft(R)Excelで求めると表1のようになった。

表1 平均値

	正解数	タイム (秒)
音なし	18.6	28.9
音あり	18.2	31.3
差分	0.43	-2.38

#### 4 結論

結果から警告音が鳴っていない場合に比べて鳴っている場合は正解数が減り、タイムが増加していることから警告音は人の処理能力の正確性とその速さを低下させることが分かった。

また、ストループテストは被験者による正解数やタイムの誤差が小さいためこのような実験に非常に有用であることが判明した。今後はこういった警告音の緊急時における短所をなくすことを目標とし、そのテンポや音の高さを変えて研究していきたい。

##### 【参考文献・参考Webページ】

- 1) 効果音 警報 > 『機械系音』 by On-Jin～音人～ (<https://on-jin.com/sound/meka.php>), 2016年9月14日アクセス
- ・ 緊急時の警告音に関する人間工学的研究 (<http://humanomics.jp/wp-content/uploads/toyoc>), 2016年9月14日アクセス



**岡山県立倉敷天城高等学校**

**〒710-0132 岡山県倉敷市藤戸町天城269番地**

**TEL 086-428-1251 FAX 086-428-1253**

**URL <http://www.amaki.okayama-c.ed.jp/>**

**e-mail [amaki@pref.okayama.jp](mailto:amaki@pref.okayama.jp) (学校代表)**